

DPC データから見るがん診療の実態

石川ベンジャミン光一

(国際医療福祉大学大学院 医学研究科)

近年注目されているビッグデータには、悉皆性が高い大量かつ多様なデータを、迅速に収集・分析できるという利点がある。医学においても、実地医療における診療の実態を把握し、課題の発見と新たな発想の礎となることへの期待から、様々な大規模医療データベースの整備と活用が進められている。

我が国の多くの病院では、①医師による指示を管理するオーダーエントリーシステム、②指示に従った診療の遂行を支援するための各種部門システム・実施記録システム、③診療結果を記録するための電子カルテシステム、④診療報酬請求を行うための医事会計システムが整備されており、日々の診療についての情報が電子化・蓄積されている。そうしたシステムから全国標準の形式により a)検査・治療等の診療行為についての情報と、b)退院サマリによる基礎的な臨床情報とを収集することにより、我が国でも最も活用が進んだ医療ビッグデータとなっているものが DPC データである。

DPC データは、我が国独自の患者分類である DPC(Diagnosis Procedure Combination) と、入院 1 日あたりで診療報酬の支払を行う方法である PDPS(Per-Diem Payment System)に基づく急性期入院医療の包括支払制度(DPC/PDPS)において、分類の精緻化や医療資源投入量の把握・支払金額の設定の根拠として利用するために、厚生労働省保険局が行う調査の中で収集されている。DPC データは全国の病院の約半数で作成されており、そのデータは医療機関内における診療の品質管理や経営分析や複数の医療機関からのデータを集積した研究にも活用されている。また厚生労働省による調査の結果では、各病院の傷病別・治療別の患者数・入院患者数等のデータが公開されており、患者推計と対比した地域別の需給分析やアクセシビリティの分析などが可能となっている。

DPC データが普及することにより、大規模データに基づく診療実態の把握は大きく進歩した。しかしながら、その活用の範囲を広げていく上では、患者の長期予後情報をはじめとする詳細な診療情報が含まれていないこと、施設間での患者データの統合ができないことなどの制約もあり、今後は他のデータとのリンケージを通じてより高度な分析を実現していくことが期待されている。

御経歴

令和元年 10 月 30 日現在

石川 ベンジャミン光一
(いしかわ べんじゃみんこういち)



<略歴>

1995 年 東京大学大学院 医学系研究科 保健学専攻 博士課程 修了
同年 国立がんセンター 研究所がん情報研究部 研究員に採用
2006 年 同 がん対策情報センター 情報システム管理課 システム開発室長
2011 年 国立がん研究センター がん対策情報センター がん統計研究部 がん医療費調査室長
2016 年 同 社会と健康研究センター 臨床経済研究室長
2018 年より現職

<参考>

DPC データ等のオープンデータに基づく可視化資料：
<https://public.tableau.com/profile/kbishikawa#!/>